

会 長 講 演

伝統を革新する赤十字看護師の決断とチャレンジ

Decisions and Challenges of Red Cross Nurses to Innovate Tradition

川嶋みどり Midori Kawashima (日本赤十字看護大学, 健和会臨床看護学研究所)

キーワード: 伝統, 革新, 独創性, 優れた看護実践, 決断

key words : tradition, innovation, originality, excellent nursing practice, decision

はじめに

伝統という言葉の受け止め方はさまざまであるが、芸道の奥義、一家相伝など、保守的な印象とともに、その名において守るべき価値観でもある。一方、革新とは、新しく若く進歩的などの反面、失敗や破壊などのイメージもある。だが伝統とはいえ、古い心のありようや手技などが形を変えずに続いてきたわけではなく、折々の社会現象や問題意識によって革新を繰り返しつつ、集団や個人に特有のハビトス(型)を形成してきた。従ってその受け止め方も一様ではない。赤十字看護師らの場合も130年余の歴史の重みを背に、それぞれが抱く伝統の受け止め方は、世代によって異なることは容易に想像できる。伝統とは、守るべき「古きよきもの」として思い浮かべる層、「その呪縛からの解放を旨とするアクションを起こしたいと願った」世代、そして、昨今では、科学技術の進展や高等教育の普及により、「真理探究」「職業的自律」を求める上で、伝統という過去の文化は不要と受け止める向きがあるのではないだろうか。

共有しておきたいことは、看護の伝統を革新することは、時代に相応しい看護を創造する道に通じることである。そこで、本学術集会のメインテーマを受けて、赤十字看護の核としての伝統を探り、その価値を継承するに当たって求められる革新とは何かを問うなかで、過去において諸先輩らが普通に行っていた優れた看護への回帰こそが、革新にはかならないのではないかと改めて気づいた次第である。とはいえ、現在の医療環境のもとで、そのことを実践するのは容易なことではなく、専門職としての強い決断とチャレン

ジを抜きにはできない。受け手目線を大切にしながら、伝統を軸足にした赤十字看護のオリジナリティに迫りたいと願う。

赤十字看護の起源と伝統

赤十字国際委員会が誕生した当時の理念は、軍の補助機能として無償の奉仕をすることであった。この意を受けて日本では、1886年に博愛社(半年後、日本赤十字社と改名)が病院を創設したが、その目的は、兵士らの救護に当たる看護婦養成のためであった。そのため1890年の養成開始後まもなく始まった日清戦争から太平洋戦争の終結までの50年間のあいだ、赤十字看護婦らは戦時救護に派遣されることになった。その間、濃尾地震、三陸沖津波、関東大震災などの自然災害時の救護にも当たった。戦争、災害のいずれも極限状況下における活動であるから、心身ともに強固な耐える力を必要としたことはいうまでもない。こうして、赤十字看護の伝統の主軸をなすものは、優れて心のありように特化されたが、当時の時代背景の影響も抜きにはできない。

すなわち、明治維新後誕生した新日本政府は、自由民権運動や不平等条約の撤廃など、旧体制からの脱皮を経て政情不安定の時期を迎え、欧米列強とならぶ国家体制を構築する動きに突入する。有事の際の海外派兵を考慮に入れた政策から、富国強兵の名のもとに、軍隊整備、徴兵制が布かれ、皇国史観に基づく「皇室への報恩」を柱に教育勅語による思想形成が広く普及する。こうして、忠君愛国、家父長制による夫唱婦随、孝行、貞節、儉約、友愛などが、当時の日本人の

心根に据えられた。

これらの社会的風潮は、赤十字看護師らの精神的バックボーンにも強く影響し、看護は、国家に身を捧げる義務として位置づけられた。そのルーツは、1891年濃尾地震の救護活動に際しての佐野常民社長の訓示に遡ることになる。これが救護員十訓として、日清戦争から太平洋戦争までの数十年間にわたり赤十字看護師らの使命感、忍耐心、潔癖さを主軸とする奉仕の精神として継承されたに留まらず、赤十字看護師の社会的イメージともなった。

【救護員十訓】—1896年、【看護婦訓戒】—1898年には以下のような記述がある。

- ・ 傷病兵を看護するのは国家に対する義務であり、
- ・ 階級秩序を守り、待遇の善し悪しや勤務繁忙などへの不平不満は厳禁。
- ・ 物資の欠乏、激務の苦しさに耐えるのが救護員の本分である。
- ・ 有事の際に応召する兵士は国家の楯であり、かれらを看護するのは女性の名誉である。

こうして、己を捨てて国家に身を報じ、規律と服従により困難と困窮に耐える力が、赤十字看護婦の精神的支柱として太平洋戦争まで続いたのであった。

2つの調査から迫る赤十字看護

1) 日本赤十字社中央病院救護看護婦養成所卒業生(1925-1939) 20名への面接調査から(国分・内海・村瀬他, 1994)

第二次世界大戦以前の日本赤十字社病院における看護の実践とその技術教育はどのように行われていたかを明らかにするために、傷病兵収容開始以前の一般病院として機能していた時代に勤務していた20名への面接調査からの概要である。

赤十字病院は救護看護婦の養成を目的としていたため、病院そのものが教育機能を果たしていた。彼女らは、「よい看護とは、患者さんを大切にすることを看護行為や言葉・態度に表現していた」といい、直接的ケアそのものよりも、心地よい結果をもたらす上での種々の心遣いといったことが述べられている。たとえば「①病棟環境の清潔を図るためのお磨き ②失禁布団のつくりかた ③洩れない氷嚢の結び方 ④配膳室の蒸気釜の活用による食事援助 ⑤差し込み便器の包み方 ⑥肺炎時の温湿布材料の作り方 ⑦散剤を与える時の小皿とオプラー利用のしかた」などである。

当時の病棟は、各看護単位に婦長と卒業看護婦1名のみで、その他の看護要員は、勤務と称された実習による生徒の労働力によっていた。1年生は2年生を、2年生は3年生、3年生は卒業生を見習い、その指示を得ながら学んでいた。3年生以外の者は殆ど座ることなく立ち働き、先輩の許可なしには帰寮できなかった

が、いつの間にかその厳しさに耐える訓練ができていたという。理不尽と思われるような厳しさも、それを乗り越えた自信がバックボーンとなったらしく、彼女ら全員が、皇室の庇護と軍の期待のもとで、救護員十訓を信条とした誇りある教育に対する自負と感謝を表出し、厳しい訓練から得た自信を語っていた。また、家族や付き添いのつかない看護体制は、患者からの金品は一切受け取らないしきたりとともに一般市民の信頼の要素になっていた。

2) 赤十字の教育を受け赤十字病院で働いた看護師18名(1950-2000卒)へのフォーカスインタビュー専門学校、短大、大学という教育制度の差異年代別変化を背景にした調査(川島・守田・川原他, 2008, pp.4-17)

1945年から2000年という日本の戦後半世紀にわたって、赤十字の基礎教育を受けた卒業生らの卒業年次はかなりかけ離れているだけではなく、専門学校(旧制)、短期大学、大学卒業生に分かれているにも関わらず、回答した内容は、長年月をかけた戦時救護や国際紛争などの、被災者救援活動の中で精練された赤十字精神の根本理念に合致するものであった。すなわち、どの時代にあっても高く支持されていたのは、「ひとりの人間として相手を尊重すること」「患者の代弁者として常に患者の立場でものをいうこと」「患者の安楽を中心に」「実践を重視する」ということであった。まさに、「人道(ヒューマニティ)」の精神と看護の基本姿勢が息づいていた。「ベッドサイドで自分自身の五感を駆使した観察」「根拠をもった看護実践」は、赤十字の基礎看護教育を受けた卒業生に時代を超えて高く支持されており、「実践重視」の姿勢は理念として受け継がれていることが明らかになった。

しかし、実践能力の自己評価は、「熟達した技術をもって看護を提供していた」と明確に認識している者は、1950年代前後に比べて年代を経るごとに有意に減少傾向であった。技術の反復練習の機会も、1950年代を境に年代を追うごとに有意に減少していた。「ベッドメイキング、イブニングケアやモーニングケア、排泄に関するケアの実施など、基本的なケアに対して自信をもって行えていた」と答えた者も、1950年代を頂点にして年代毎に有意に減少していた。これらから、実際の実践能力の自己評価は、時代とともに低くなる傾向にあることがうかがえた。この点は、高等教育が軌道に乗った昨今の卒業生の自己評価の低さをもたらした要因に関する教育研究の仮説となり得るものである。

また、看護教育や実践の中で「軍隊のような厳しさ」「礼節」「生活規律」を学んだという認識が1940年代後半の卒業生に有意に高く、それ以降激減していた。1970年に入ると、社会に向けて自己主張することや権威主義に対する反発心が育ってきており、1980年

代中期に入ると、「考えて実践すること」や「なぜ」を踏まえた実践」が重視されるようになっていた。1990年代には大学教育が始められ、主体性や自己主張が大切にされた教育が展開され、実践回帰の兆しが見えはじめたことも確かである。

2つの調査から—息づく伝統

赤十字看護の伝統は、戦前、戦中において、規律遵守はもとより、上官への服従第一の環境の中で、自制心、忍耐心、自己犠牲的精神に支えられて救護活動に従事した看護師らの言動と、時代ごとの教育を通じて伝えられた。その後、紆余曲折しながら身体化され、平時の今日に相応しい形で表出されてきたといえよう。

たとえば、私自身が垣間見たある婦長の所作の中に、赤十字看護の象徴の一端がクローズアップされている。その婦長は、末端の看護師らにとっては寄りつきがたい威厳と厳しさがあがり、視線を合わせるのすら恐れたものであった。ところが、患者に対する丁寧な所作と優しい言葉遣いは、まるで別人のようであった。苦痛のある表情を見るなり、「おみあしお擦りいたしましょう」と言うのが早い。手は掛け物の中の患者の足に触れて、見る間に患者の表情が和らぐのを見た。無言の背中の教えから学んだことは、看護実践の美学的解釈とでも表現できようか。すなわち、行為を反復する過程での目標と所作の秩序（法則性）がそこにはあり、指先から足先まで全身の感覚が響き合っていて、その所作全体が美しい。おそらく、行為者は「できた喜び体感」を味わうことだろう。このような所作を、赤十字看護独自の流れる様な美しさと称したい。

すなわち、生命を左右する局面に対峙し、苦痛や不調にからむ不安へのケアを通して、個々の看護師の心のありように通じてきた赤十字本来の伝統的精神がここにある。それは決して順調とはいえないまでも、近代化と異文化を取り込みながら精練を重ねつつ、独自の人道主義とヒューマン・ケアリング思想を融合して、国際赤十字の源流とも言えるデュナンの提唱した「実践に価値をおく赤十字看護」を文字通り展開してきたと評価できる。問題は、この誇るべき伝統が正しく継承されているかどうかである。

現在の医療機関は、その背景、規模の大小を問わず、市場主義、経済優先、効率化に価値をおいた機械化が進み、能率主義のもと、極論すれば人間不在の状況が常態化している。赤十字病院も例外とはいえず、ともすると看護師らは、その流れの渦に巻込まれかねない実態も見聞する。果たして、専門職の矜持を保った看護の提供ができていだろうか。そこで、いま1度、赤十字看護なるものの伝統の源流と、内外の契機によって革新の波をくぐり抜けてきた過程をたどることにより、今、何が求められているかにアプローチす

ることで、視界が開けるかも知れない。

革新の連続を経て

赤十字看護の伝統の最初の革新は、敗戦による日本国民全体の価値観の大転換が契機になった。連合軍の占領下のもと、あらゆる局面での軍国主義の否定は、明治以来続いた赤十字の伝統なるものの全否定にも通じるものであった。上意下達を当然とした赤十字看護師にとっては、専制主義から民主主義へ、戦時救護から平時看護へのパラダイムの変換を受け入れるということは、如何に大きな葛藤になったことだろう。

続いて、連合軍による一連の諸改革による諸制度の確立は、看護業務内容や看護師自身の意識変革にも及んだ。看護の専門職化に先立つ看護教育のモデルスクール構想のもとに、日本赤十字社中央病院看護婦養成所を専門学校（以下、日赤女専）に昇格させ、戦前から高等教育を行っていた聖路加女子専門学校（以下、聖路加女専）との合同教育を開始することになった。これは新たな赤十字看護への革新の大きな一歩になった（後述）。前後して、保健婦助産婦看護婦法施行、総婦長制施行、職能団体結成などが行われたが、これらすべてが、それまでの赤十字における看護業務内容や看護管理体制をはじめ、医師との関係をも変える動機になった。

第3次ともいえる革新は、看護師の生き方を大きく変えたばかりか、病院のあり方までを変容させた看護師の権利闘争「看護師の人間宣言」行動を挙げないわけにはいかない。旧来の個人的犠牲を伴った奉仕の精神から、ナイチンゲールのいう「犠牲なき献身こそ真の奉仕」を掲げた画期的なもので、労使双方とも意識の変革と旧来の価値観を問われたのであった。その後、高度経済成長、地域医療計画、医療技術の高度化、IT化などを経て現在に至っている。

溶け合った2つの校風から 新たな赤十字看護へ

1946年から1953年までの7年半にわたる日赤女専と聖路加女専との合同教育の評価は必ずしも一様ではない。純粋な赤十字という視点から見て、赤十字思想が薄まったとの考え方があるかも知れない。だが、客観的にみれば、戦前からの頑ななまでの古い伝統に固執せず、新しい時代に即した一歩を無理なく踏み出すことができたという面から評価できるのではないだろうか。

戦中の救護看護活動により伝えられてきた純粋な赤十字精神と、キリスト教精神を柱に近代的看護教育によって培われた校風がともに溶け合いながら変化せざるを得なかったのは、占領力学の及ぼした影響を無視

できない。同時に、敗戦による国を挙げての価値観の転換に加えて、看護の専門職志向への強い意志が働いたことによると思う。当時聖路加女専の教授であった高橋シュンは、両校の違いを「水と油」と称したが、和と知と友情を加えてうまみのあるドレッシングになり、戦後の新たな看護の道を拓く潤滑油になった。

2つの学校の学生たちは、共通のカリキュラムのもと同じ教室で学び、日赤中央病院を臨床実習の場として、両校混在のメンバーでのグループ編成で喜怒哀楽を共有した。教科書も参考書もなく、筆記用具さえ不自由な中での学習であった。当時の教育内容は省略するが、各領域の一流の外部講師による講義も魅力的であったが、看護教師らのひたむきで情熱的できびきびした態度は、学生らの憧れの存在でもあった。今にして思えば、ほとんどが20歳代後半の若い教師らの醸し出す威厳はどこから来たのかと思われる。「知る」ことよりも、「できる」ことに重きをおいていたことは確かであり、フォームの美しさの底にある真理をからだで覚えることに主眼がおかれていた。赤十字では、養成開始以来、看護法に関しても医師の執筆した教科書で、医師によって教育されるのが当然とされてきたのが、この時以来、看護師による看護教育の実現を見たことも画期的なことであった。

教師も学生も同じ屋根の下で寝食を共にした寮生活体験は、乏しい中でも豊かな友情を育む場となった。朝5時半の起床を告げる鐘の音から9時半の消灯までの大半の時間は授業や実習に割かれていたが、赤十字の学生も聖路加の学生も始業前の朝礼は、全員が講堂に集合して基督教礼拝を行い、夕礼拝は点呼をかねて学年ごとに各階のラウンジに集まって同じく夕べの祈りを捧げた。冷暖房もなく洗濯機もない環境のもとでの生活であったが、空腹をかこちながら、規則をかいぐるスリルを楽しみながらの心豊かな思い出深い学生生活を送った。

この時期の両校の卒業生らは、いずれもそれぞれの母校の卒業証書と「東京看護教育模範学院」の卒業証書を手に卒業し、約40年間にわたって日本の看護界をリードする立場で働いた(大学学長、看護部長、各県看護課長、看護協会各県支部長等、卒業生の比率からも実に多くを占めている)。

つまり、現在の赤十字看護と看護教育の伝統は、明治以来の思想の片鱗を汲みながらも、この戦後の特殊状況下で統合された新たな文化の流れのもとに革新されたといえよう。

教育と臨床とのコラボレーションによる スタンダードの確立

看護の真価は、病気や高齢、障害の如何を問わず、また、どのような病態、病期にあっても、その人が人

間らしくあること、すなわち、ごく普通の営みを自分らしく行うことができていること(尊厳ある生)を専門的に支援することで具現できる。つまり、人間らしさの普遍の上で自分らしく生きることを可能にするのは、ごくありふれた営みを決まりきったやり方で滞りなく行うことができることにほかならない。個体レベルの生活行動援助(療養上の世話)を看護独自のはたらきとして位置づけているのはこのためである。

そして、21世紀の現代では想像のつかないほど貧しく乏しい臨床の環境(冷暖房も湯沸かし設備もない)や諸物品(使用後の体温計は缶詰の空き缶を利用し、使用后ガーゼも綿花も再生するなど)のもとで、1950年代から60年代はじめに病棟看護師らの日々のルーチン業務のスタンダードだったのが、患者の朝の洗面から就寝の準備までの日課の一切であった。その人の健康時の習慣を考慮しながら行う日々のケアは、治療や手術前後の患者にとっても特別なことではなく、学生も受け持ち患者の1日の日課を視野に入れた看護計画のもとで実習するのが常であった。

日常ケアのスタンダードとはいえ、日常性よりも救命を主眼にせざるを得なかった戦時救護看護の場で、医行為の補助が中心となっていた旧制度の看護師らと、新しいカリキュラムのもとで専門職志向の看護教育を進める教師らとの相互理解と譲歩なしには実現できなかったであろう。朝食前のモーニングケアのために、学生の実習は午前7時から始まるのも当然視されていた。

ところが、昨今では、そうした日常のきまりきった日課を遂行することは、看護の専門性の範疇以外といわぬばかりのケアの後退がある。見た目は確かにごくありふれているかも知れないが、そのケアを通して生きる意欲を引き出し、治療効果を高めることになるとの知識は格段に増えているにもかかわらず、次第に省略され続けて看護師の意識からも遠く結果を招いてしまった。時代の変化があっても人間の基本的な営みや、快不快の感情は当時とは変わっていないのに、生活の流れを維持継続する上で有用なスタンダードは陰を潜めてしまったのは何故か。医療の高度化、高度急性期医療の猛進がその一因であると思われるが、理論を実践に先行させ、実際に行うことよりもアセスメントに重点をおく教育のありようとも無関係ではないと思う。

優れた看護実践への回帰

優れた実践こそ、看護の社会的有用性の地歩を築く第1歩である。そのヒントは、現在では、伝説となった感はあるものの、私の初心者時代のルーチンケア内容にその例を見ることができる。

(1) 流水によるベッド上手洗い

食前やトイレを済ませた後に手を洗うことは、日本の普通の家庭では幼い頃から習慣づけられた行為の1つである。1950年代の病棟では、食前、排泄後には、床上安静の場合でも、必ず流水による手洗いが看護師によって行われていた。ところが、昨今の病院に入院中の患者は、ポータブルトイレでの排泄後、自分で始末をした手も、入院時に売店で求めさせられた濡れティッシュで指先を拭く程度で我慢するしかない。流水で洗うよりも、消毒液のスプレーでの手指消毒をベターとする考え方もあるようだが、暮らしの中での手を洗う習慣を、入院を理由に捨てることは、果たして進歩といえるだろうか。

(2) 気持ちよく症状緩和する背部ケア

また、バックケア（背部の手当）も、50年代にはルーチンな日常ケアとしてイブニングケアの中にくみ込まれ、就寝の準備の一環として行われていた。熱い湯に浸したタオルをしぼって患者の背部清拭後、乾いたタオルで水分を拭き取った後マッサージをすれば、眠剤の必要なく良眠が得られた。70年代からは日本古来の入浴文化を意図して全身を蒸したタオルで蒸す方法が普及、熱布清拭と命名したが、患者さんらの気持ちよさの反応から、日赤サウナと称された時期もあった。流れるような熟達した手技は、患者に安楽をもたらすことはいままでのない。その結果、コミュニケーションの身体チャンネルを開放し、患者の全人格がケアに応答するばかりか、温熱刺激により腸蠕動を促し排ガス・便の援助にも通じる。文字通り、自然の回復過程を整える優れた支援技術であり、熱湯に浸した地厚なタオルをしぼって背部全体を覆うケアは、まさに、気持ちよく症状を緩和する看護独自の方法として有用である。ところが昨今、その名も廃れた上、実践例も殆どないのが実情である。

プロセスが気持ちよくアウトカムも安心で安全・安楽な看護ケアの復権こそ、看護が看護たり得るのではないだろうか。

好機のいま、何を革新し、 どのような決断をなすべきか

看護が医学の1つの支流としてではなく、看護独自の道へのギャチェンジをすることこそ、看護が看護たり得るといふこと、そして、まさに今がその時であることを共有しようではないか。たとえば、現代の三大健康問題といわれる、がん、糖尿病、認知症のいずれも、生活習慣に起因する。従って、これを克服するための最重要課題としては、生活習慣改善とセルフケアの動機づけにほかならず、いずれも優れて看護独自のアプローチが有用である。また、人口の超高齢化に伴う疾病構造の変化は、高度急性期から高度慢性期への

移行の必然性を示唆している。疾患をかかえつつ生活を継続する人を支える立場からも、これまでの治療の概念からQOLへの発想転換が求められる。さらに、看護独自の生活行動援助による気持ちよいケアを通して自然の回復過程を整えることができれば、検査と薬中心の現代医療の歪みをも是正することが可能である。すなわち機は熟しているのである。

そこで、困難に立ち向かった戦時救護時の諸先輩らの献身性に学び、長年にわたって培い伝えられてきた伝統的技を発掘して復権させることこそ、伝統の革新ではないだろうか。だが、あまりにも至便さに慣れ過ぎた現状のもとで、これを実践するのは、口で述べる程たやすいことではない。臨床に価値をおく赤十字ならではの風土に軸足を定め、独創性と高度実践能力を発揮して、それなりの覚悟のもとでの決断が求められる。何故なら、革新には必ず阻む力が働くので、それに立ち向かうチャレンジ精神が求められるからである。

阻む要因を押し返しチャレンジする力

組織の一員ではあるが、1人の個人として看護師として、理に合わないことに追従する姿勢は、患者中心の思想、いのちの尊厳を守ることとは相容れない。「こうあるべき」「こうしたい」を実現するためには、いくつもの壁を破る勇気と決断が必要である。不条理と正義感との葛藤を恐れず、「受け手にとってそれは?」「看護師にとってそれは?」を評価ツールとして、こだわり、くじけず、達成するまで退かない決意をもって、阻害要因を押し戻すことである。まさに実践こそ、看護の真価発揮の要であり、受け手の信頼の根拠となる。看護と看護でないものをわきまえて、看護師が看護に集中できる職場環境の整備を図り、個々の看護師の能力がフルに発揮できるようにする。全国92に及ぶ赤十字の病院は、伝統を重んじながらも、古く固い殻は脱ぎ捨て、地域の核としての役割を果たすべきである。また、高等教育の立場から大学は、赤十字看護師のマンパワーに貢献するのみでは事足りない。国内外の優れた看護人材の育成により、赤十字看護の普遍化を図るべきであろう。こうして、看護全体の技術水準を向上すれば、国民の看護への期待に応え得る、真の専門職としての1歩がより確かになることは論をまたない。

現代の看護専門職の直面する危機を認識すれば、看護が看護であることの意味と価値を抜きにはできない。古きよきことへのノスタルジーではなく、それへの回帰こそ、次世代に向かっての革新であることを確信すべきである。

「看護の専門職化は、日常繰り返されるベッドサ

イドの看護実践の重要性を希薄にすることではない。『臨床看護』から『高邁な看護』への迂回路はない」シオパン・ネルソン

文献

川嶋みどり・守田美奈子・川原由佳里他（2008）. 赤十字病院における優れた看護実践の発掘と赤十字看護論構築に関する研究. 平成19年度～20年度赤十字と看護・介護に関する研究助成金 研究成

果報告書, 3-17.

国分アイ・内海節子・村瀬千春他（1994）. 戦前の日本赤十字社病院における看護実践とその技術に関する考察. 日本赤十字愛知女子短期大学紀要, 4(2), 123-143.

ネルソン, S. 実践の重要性：看護の歴史からの教訓. エイケン, L., ベナー, P. 他著／早野真佐子訳（2008）. 看護の危機 人間を守るための戦略. 東京：ライフサポート社.